

新美術
時評

近藤誠一

「なぜ、山に登るのか？」
「山に登るの山があるから」
では、「なぜ、絵を描くのか？」
「？」
読者のみなさんへの答えは如何？
芸術とは繊細な感性と創造性、情熱が生み出すもので、最先端の科学でも解き明かすことはできないと考えられている。しかし認知科学の発達がいくつものヒントを与えてくれる。

『「トはなぜ絵を描くのか」―芸術認知科学への招待』（齋藤 亜矢著／岩波科学ライブラリー）では、いくつかの科学的分析が紹介される。まず人の文化や技術とは、脳の器質的な構造などの生物学的な進化によるものではない。

祖先から受け継がれた知識の積み重ね、いわば「知の遺産」だと考えられているという。そこで人間に近いチンパンジーと人の幼児の行動を比較する。描くためには運動能力や知性が必要だが、幼児が発達のどの段階でこれらの能力においてチンパンジーを超えるかを見るためだ。

絵を描くには、まず物（筆記具）と物（紙）とを関連付ける「定位操作」という能力が必要になる。これにはかなり高度な知性が必要で、それができるのは霊長類の一部に限られる。5才のチンパンジーは、人の1歳児のなぐり書きのようなことはできる。トコトコが表象、つまり何か具体的なモノの形を描くよ

うになるのは、人の子は3才くらいだが、チンパンジーにはそれができない。何故か。

表象を描くには単なる「なぐり書き」ではなく、思ったようにモノの形（描線）を描くという「運動調整能力」が必要なの

ではない。これは、人の子は3才くらいだが、チンパンジーにはそれができない。何故か。表象を描くには単なる「なぐり書き」ではなく、思ったようにモノの形（描線）を描くという「運動調整能力」が必要なの

ではない。これは、人の子は3才くらいだが、チンパンジーにはそれができない。何故か。表象を描くには単なる「なぐり書き」ではなく、思ったようにモノの形（描線）を描くという「運動調整能力」が必要なの

ではない。これは、人の子は3才くらいだが、チンパンジーにはそれができない。何故か。表象を描くには単なる「なぐり書き」ではなく、思ったようにモノの形（描線）を描くという「運動調整能力」が必要なの

る。絵は言葉にできないものを表現できると考えられているが、実は言語能力が背景にあって初めて絵を描くことができるのだ。人が描くということは、目の前にあるものを「写す」のではなく、その人がそれについて持っているイメージを描くに過ぎない。

では初めの問にもどろう。人は「何故」絵を描くのか？それは頭の中にあるイメージを外化する過程で、新たなイメージが湧いたり、他のイメージと組み合わせられて美在しないものを作り出すことができるという発見、創造の喜びである。さらに人には社会的な動機がある。頭の中にあるイメージを他者に伝え、共有すること、つまり絵を介したコミュニケーションは大きな動機付けとなるのだ。

それは即ち絵を見るものについても言える。ある作品を見るとき、我々はアーティストのフィラターを通して抽出された新しい見え方に出会い、感動する。作品と出会うことは、それに刺激されて自分の知識や記憶を探索することにもなる。アートは、それを制作する人だけでなく、鑑賞するひとに対しても創造的な作業をうながすものなのだ。先行き不透明な今の時代にこそ、こうしたアートのもつ力が生きついで。

（近藤文化・外交研究所代表）

人はなぜ絵を描くのか

たイメージを他者に伝え、共有す

（近藤文化・外交研究所代表）